



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3475 号 2017.1.22 発行

生後5カ月で発症 ワクチン求め活動

朝日新聞 2017年1月22日

大阪市東成区の田中世生（た・なか・せ・い）さん（13）は生後5カ月だった2004年、突然の高熱で入院した大阪赤十字病院で細菌性髄膜炎と診断されました。手足のけいれんが起き、入院から5日後には集中治療室に移って治療を受けました。2カ月間の入院で治療は終わったものの、後遺症のため、ほぼ寝た切りになりました。リハビリを続ける世生さんが2歳を過ぎたころ、母の美紀（み・き）さん（45）は、海外ではワクチンの普及で細菌性髄膜炎が激減していることを新聞記事で知ります。そして日本でのワクチン導入を求めて署名活動を始めました。

■生後5カ月、突然の高熱

大阪市東成区の田中世生（たなかせい）さん（13）は、肢体不自由児が通う大阪府立光陽支援学校中学部の1年生だ。

自分で立ったり歩いたりすることはできず、食事の時は細かくきざんだ食べ物を口まで運んでもらう。言葉は話せず、難聴で、時々てんかんの発作も起きる。頭にたまる髄液が脳を圧迫しないよう、体内に埋め込まれた管を通しておなかの中に流している。

さまざまな障害を負う原因になったのは生後5カ月で発症した細菌性髄膜炎だった。鼻やのどに常在する細菌が血液中に入り、脳を包む髄膜に炎症を起こす病気だ。

生後2カ月のときの世生さん=田中美紀さん提供

世生さんが突然、高熱を出したのは2004年5月17日。首が据わり、保育園に通うようになって1カ月半ほどたった月曜日だった。この日の早朝、母親の美紀（みき）さん（45）がぐずる世生さんを抱き上げ、体が熱いのに気づいた。熱を計ると、38.4度。美紀さんは勤め先の会社を休んだ。



午後になると、ミルクを飲む量が減ってきた。近所の診療所に連れていくと、医師は「おたふくかぜかもしれない」と言った。

処方されたシロップの薬を飲ませたが、翌日になっても熱は下がらない。ウトウトしてはすぐに目を覚まし、大きな声で泣く元気もないようだった。

19日になっても症状は良くならなかった。何日も仕事を休めない美紀さんは、電車で40分ほどの所に住んでいる自分の母親（65）に来てもらい、看病を頼んだ。

その日の午前中、美紀さんの母は、おむつを替えようとして、内側に少量の赤っぽい尿がついているのに気づいたという。「血尿だ」と思って、2日前に受診した診療所に行くと、医師は「うちでは治療しきれない」と言って、大阪赤十字病院（大阪市天王寺区）への紹介状を書いてくれた。

母から連絡を受けた美紀さんが病院へ駆けつけると、世生さんは処置室のベッドに横た

わり、点滴を受けていた。ぐったりした様子だったが、美紀さんに気づいて、にっこり笑ったという。

その日を境に息子の笑顔をしばらく見ることができなくなるとは、この時は想像もできなかった。

■呼吸器つけ、けいれん治療

2004年5月、当時生後5カ月だった大阪市の田中世生（せい）さん（13）は、突然の高熱で市内の大阪赤十字病院に入院した。

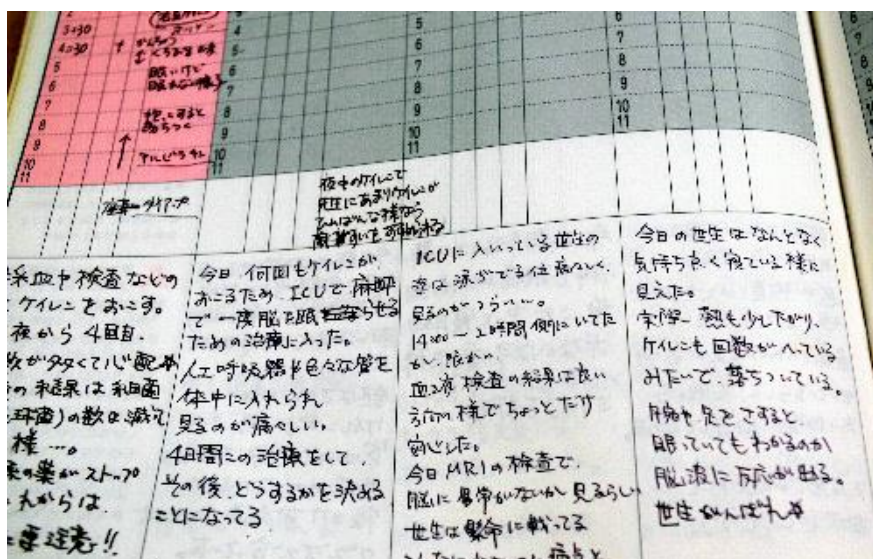
診察した小児科の坂本晴子（さかもとはるこ）医師（42）は細菌性髄膜炎を疑い、すぐに血液の中の細菌を培養する検査と腰の背骨の間に針を刺して髄液を採る検査を行った。髄液の顕微鏡写真にはそれまで見たことがないほど多くの細菌が写っていた。

「肺炎球菌による細菌性髄膜炎」。両親に診断結果を伝え、病気の特徴を詳しく説明した。

「脳の周りがある髄膜に炎症が起きているので、脳や神経に影響が出やすいです。重症になると、呼吸が止まったり、心臓の働きが不安定になったりすることがあり、死亡す

る人もいます」

美紀さんがつけていた育児日記。入院期間中は「世生の姿は涙が出るくらい痛々しく、見るのがつらい」と書かれていた



小児の細菌性髄膜炎の原因菌としてインフルエンザ菌b型（ヒブ）や肺炎球菌などが知られている。肺炎球菌の場合、死亡率は数%に上り、約3割に後遺症が残るとされる。世

生さんはまだ生後5カ月。「決して楽観できない」と判断した坂本さんは、あえて厳しい見通しを伝えた。

だが、母の美紀さん（45）は病気がまだそれほど深刻なものとは考えず、「治療を受ければ元気になる」と思い込んでいた。

治療では、抗生物質や炎症を鎮めるためのステロイド、脳のむくみをとる薬などが使われた。髄液の検査の結果、菌はしだいに減っていったが、手足などのけいれんがひんぱんに起こるようになった。

入院から5日後、けいれんを抑える薬の治療のため、集中治療室（ICU）へ移った。この薬は脳の働きを抑え、呼吸も止まってしまうので、人工呼吸器を付ける必要があった。

ICUに移る少し前、回診の男性小児科医から言われた。「われわれも全力を尽くしていますが、元通りの体に戻してあげられるかわかりません」。口調は重く、表情は真剣だった。

美紀さんは初めて病気の深刻さを実感した。

「夜中に高熱が続いていた時にもっと早く小児科に連れて行っていたら……」

自分を責め、夜の病室で泣き続けた。

■2歳、やっと笑顔戻った

生後5カ月で細菌性髄膜炎と診断された大阪市の田中世生（せい）さん（13）は2004年5月、入院先の大阪赤十字病院の集中治療室で、けいれんの治療を受けた。

1週間後には頭部のCT検査で水頭症の疑いがあることがわかった。髄液が頭の中に入った状態で、放置すると脳が圧迫される。聴力検査で、左耳が聞こえていないこともわ

かった。

母親の美紀さん（45）は、点滴が減って抱っこができるようになったことを喜んだが、検査の結果を聞くたびに気持ちが落ち込んだ。

入院から約1カ月後の6月には「脳室—腹腔（ふくくう）短絡術」を受けた。

頭から耳の後ろ、首、胸を通過して腹腔まで、「シャント」と呼ばれる管を皮膚の下に埋め、頭の中にたまった髄液をおなかの中に排出、吸収させるための手術だ。シャントはいまも世生さんの体に入っている。

入院は7月末まで約2カ月間続いた。細菌性髄膜炎の治療は終わったが、後遺症のため、寝返りすらできない、ほぼ寝たきりの状態になった。

理学療法士に支えられながら歩く世生さん。リハビリは今も続く＝大阪市城東区のボパース記念病院

長いリハビリ生活が始まった。

口からミルクを飲むことができなくなったので、美紀さんはスプーンで離乳食を口に運び、のみ込む練習をさせた。

1歳の誕生日を迎えた頃、口から食事や水分を少しずつ取れるようになった。やがてミルクを流し込むために鼻に入れていたチューブを抜くことができた。

2歳になる頃、退院時には無表情だった顔に変化が現れた。お風呂に入れて、音が出るアヒルのおもちゃで遊ばせている時、顔の筋肉がピクッと動いた。

「笑っている！」

美紀さんは笑顔が戻ったことを確信した。

リハビリと体の成長で、できることが少しずつ増えていった。世生さんの2歳の誕生日が過ぎ、美紀さんはようやく前向きな気持ちを持てるようになった。

2006年4月、美紀さんは自宅で購読していた読売新聞の記事に目がくぎ付けになった。海外ではワクチンの普及で細菌性髄膜炎が激減しているのに日本では承認されていないことを伝える内容だった。

■ワクチン定期接種が実現

細菌性髄膜炎の後遺症で、ほぼ寝たきり状態になった大阪市の田中世生（せい）さん（13）の母親、美紀さん（45）は2006年4月、海外ではワクチンの普及でこの病気が激減していることを新聞記事で知った。だが、日本ではワクチンがまだ承認すらされていなかった。

「先進国の日本で、なぜ子どもたちが守られていないの？」

衝撃を受けた美紀さんは、記事の中でワクチンの早期導入を訴えていた小児科医の武内一（たけうちはじめ）さん（59）を勤務先の堺市内の病院を訪ねた。「先生たちは日本の現状を知っているのに、どうして黙っているのですか」



初対面の1カ月後、美紀さんはワクチン導入を求める署名活動を始める考えを武内さんに伝え、協力を求めた。熱意に押され、武内さんは後に引けなくなった。

2010年3月、ワクチンの定期接種化を求める署名活動に参加した世生さん＝名古屋市内、田中美紀さん提供

06年10月、「細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会」が発足し、美紀さんが代表、武内さんが副代表に就いた。小児細菌性髄膜炎の主な原因菌であるインフルエンザ菌b型（ヒブ）と肺炎球菌のワクチンを早期承認させ、法律に基づく公費



負担のある「定期接種」にすることが活動の目標だった。

ネットで仲間を募り、街頭で賛同署名を呼びかけた。07年4月、5万9千人分の署名を添えて厚生労働大臣宛ての要望書を提出したのを皮切りに、計20万人分の署名を集め、国への働きかけを続けた。13年4月、念願の定期接種化が実現した。

現在、佛教大学社会福祉学部の教授を務める武内さんは振り返る。「日本は欧米に比べ20年以上ワクチン導入が遅れ、毎年数十人の子どもが細菌性髄膜炎で命を落とし、その何倍もの子どもが障害を負ったと推計される。田中さんが立ち上がって始めた活動の意義は計り知れないほど大きい」

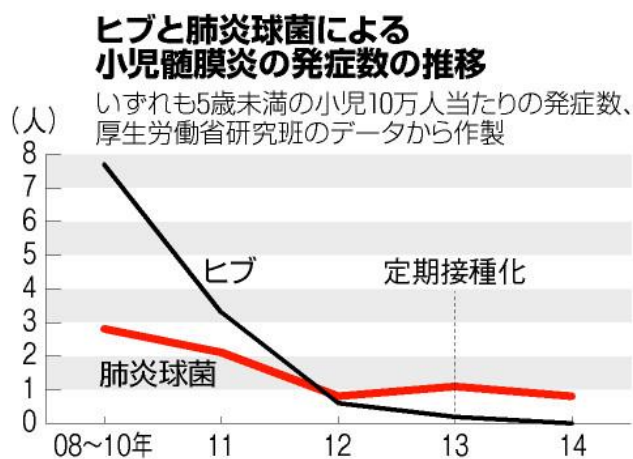
街頭での署名活動には世生さんも参加した。リハビリは今も続く。美紀さんによると、簡単な発音や表情で、喜びや不快を表現できるようになってきたという。美紀さんは言う。「これからもいろいろな人の手を借りて生きていかなければならないので、身体的な改善ももちろん、少しずつ身につけてきた、表情と声で自分の気持ちを伝える力をさらに高めてくれたらうれしい」

■情報編 小児の発症数、大幅減

細菌性髄膜炎は、鼻やのどに常在する細菌が血液中に入り、脳を包む髄膜に炎症を起こす病気だ。症状は発熱、頭痛、嘔吐（おうと）などで、進行すると意識障害やけいれんが現れる。

病気を起こす原因菌は年齢によって異なる。生後3カ月まではB群レンサ球菌や大腸菌、生後3カ月以降から小児期はインフルエンザ菌b型（ヒブ）や肺炎球菌、成人では肺炎球菌や髄膜炎菌、高齢者では肺炎球菌が知られる。

日本では、小児の髄膜炎の主な原因となるヒブと肺炎球菌のワクチン導入が海外に比べ大幅に遅れた。販売開始はヒブワクチンが2008年、肺炎球菌ワクチンが10年。10年11月から両ワクチンの公費助成が始まり、13年4月からは公費負担の定期接種となった。標準的なケースでは、生後2カ月以降、4回ずつ接種する。



ヒブと肺炎球菌による小児髄膜炎の発症数の推移

厚生労働省研究班が全国10道県で行った調査によると、ヒブを原因とする、5歳未満の小児10万人当たりの髄膜炎の発症数は08年～10年が7.7人だったが、14年にはゼロとなった。肺炎球菌を原因とする髄膜炎は同じ期間に2.8人から0.8人に減った。

肺炎球菌に関しては課題もある。同研究班の齋藤昭彦（さいとうあきひこ）・新潟大教授（小児科学）によ

ると、現在使われている「13価結合型」（90種類以上ある肺炎球菌の血清型のうち13種類の血清型に対応）の小児用ワクチンでカバーできない菌による細菌性髄膜炎が相対的に増えているといい、「さらに多くの血清型に対応するワクチンか、別の仕組みで作用するワクチンの開発が課題だ」と指摘する。

一方、成人の細菌性髄膜炎の原因となる肺炎球菌に対しては23種類の血清型に対応するワクチンがある。ただ、14年10月から始まった定期接種の対象は、65歳と、60～64歳で心臓、呼吸器などの機能が低下していたりHIVに感染していたりする人たちに限られる。

筑波大教授で水戸協同病院感染症科の矢野晴美（やのはるみ）医師は「喫煙者、糖尿病、肝臓病、腎臓病、透析の患者、がん患者、HIV感染者・エイズ患者のほか、心臓や肺に病気があったり治療でステロイドなどの免疫抑制薬を使用したりしている人は年齢によら

ず、接種が望ましい」と話す。(出河雅彦)

やおき福祉会が創立20周年祝う

紀伊民報 2017年1月21日

やおき福祉会(和歌山県田辺市たきない町)の設立20周年を祝う会が20日、田辺市新庄町のビッグ・ユーであった。福祉会が運営する各施設の職員や利用者ら約300人が集い、カラオケ大会や抽選会をして楽しいひとときを過ごした。

やおき福祉会は、前身の精神障害者小規模作業所「やおき工房」が1989年にでき、96年に社会福祉法人になった。グループホーム・ケアホーム、障害者就業・生活支援センター、地域活動支援センターなど32の施設があり、全職員は125人、利用者は300人に上る。施設の職員や利用者ら300人が参加した設立20周年を祝う会(和歌山県田辺市新庄町で) 福山敏雄理事長は「福祉会は行政はじめ多方面の方々に支えられ、ここまで歩んでこれた。一方で、施設が増え、職員と利用者が一堂に会することがとても難しくなった。ぜひ1度、こんな会を開いてみたかった。実現できてよかった」と喜んだ。



独特なタッチで動物描く 特別支援学校生が作品展

神戸新聞 2017年1月21日

作品展を開く木下晃希さん(左)と母親の真理子さん=西宮市段上町1



動物をモチーフにした独特な絵を描く兵庫県立芦屋特別支援学校(芦屋市陽光町)生の木下晃希(こうき)さん(16)=西宮市段上町1=が、作品展を23日から、神戸市中央区相生町1のフルーツカフェ「Saita! Saita!」で開く。水性ペンで着色されたカエルやカメレオンが、見る者の心を明るくする。(竜門和諒)

木下さんは2歳のとき広汎性発達障害と診断された。言葉が不自由なため、意思疎通は難しい。

幼いころからペンを握り、手放さなかったという。母の真理子さん(45)の話では、2~3歳のころは居間の壁が落書きでいっぱい。4歳になるころ、青いクレヨンで麒麟を描いたころから専ら動物を描き始めた。小学校に上がると、自由帳を1日1冊使い切るほど熱中した。

キャンバスは紙ではなく段ボール。動物園などで本物の動物を観察したこともある。多くは動物図鑑の写真を参考に、ゴリラの親子や色鮮やかなカエルなどを独特なタッチで描くようになった。

特徴的なのは描かれた動物の表情。瞳の形が円形だったり、楕円(だえん)形だったり微妙に異なるが、どれも穏やかで心を和ませる印象を与えてくれる。

展示されるのは約15点。木下さんの絵の魅力に気付き、自宅に絵を飾る住民もいる。作品展には小学校時代の担任も駆けつけるといい、真理子さんは「絵を通していろんな人が晃希を見守ってくれている。このつながりがもっと広がってほしい」と話している。

2月19日まで。平日午前10時~午後6時半(土日祝日は午前11時半から)。火曜と、2月15日は休み。Saita! Saita! TEL 078・362・6737

<近江と人と>施設の子ども 見守る

読売新聞 2017年01月22日

◇村田自動車工業所社長 村田 二さん53

家庭での養育が困難なため、児童養護施設などで暮らす子どもたちがいる。そんな子どもたちに、働く体験を通して自信をつけてもらおうと、経営する自動車整備工場で就労体験を受け入れ、さらに他社にも呼び掛けている。

施設の子どもたちは、18歳になると住まいの保証もないまま、原則、1人で自立しなければならない。自信がなく、家族の支援も得にくい環境で、大半は半年以内に仕事を辞め、更に条件の悪い仕事に向かう――。

「社会にも信頼できる人がいると気づいてもらう機会になれば」と話す村田さん（大津市で）

そんな子どもたちの状況を知ったのは、2年前、大津市の児童養護施設「小鳩の家」で開かれた職員らとの懇談に、県中小企業家同友会の大津支部長として参加したときのこと。施設は自宅に近く、親しみを感じていただけにショックだった。「地域の子どもたちを守りたい。何かできないか」との思いが募った。

◇仕事体験受け入れ

その頃、県内の社会福祉法人などでつくる「滋賀の縁創造実践センター」では、児童養護施設などの生徒が数日間、企業などに赴く「ハローわくわく仕事体験」の企画が進んでいた。施設の子どもたちに「社会にも応援してくれる人がいることを実感してもらう」のが狙い。一般の中学生の就労体験より、丁寧な受け入れ態勢が求められた。

その受け入れ企業として手を挙げるとともに、他社にも広げようと、同友会内に推進委員会を創設し、会員企業に参加を呼び掛けた。

「18歳になったら小鳩で働く。ここを出ない」と言い張っていた小鳩の男子中学生。体験当日は、不安と緊張からか、涙を浮かべた。現場では、度々「大丈夫か」と声をかけ、社員が横で見守った。



中学生は一生懸命だった。タイヤやブレーキを外す作業に目を輝かせ、手洗い洗車には集中して取り組んだ。その姿に社員も心打たれ、真剣に接した。中学生は「褒められ大事にされた」と感じたようだった。「自分も人の役に立てる」と自信を持った、中学生はその後、様々な企業の体験に参加するようになった。

大切に保管している参加者からの礼状や年賀状

「仕事が滞るのでは?」。そんな問いに「手間はかかるが、それ以上にいいことが

ある」と答える。

会社では10年ほど前から中学生の就業体験も受け入れている。当初は「邪魔になる」と社員に反対されたが、いざ生徒が来て、興味深そうに作業に見入り歓声を上げる姿に、社員は自らの仕事を見つめ直し、地域貢献への誇りを感じるようになった。施設の子どもたちの受け入れも、初心に帰るきっかけになったという。

「来てくれたら大歓迎。他に行ってくれてももちろんいい。地域の我々が、子どもたちを見守る仕組みを作らないと」。さらに何ができるか。その方法を探り始めている。(生田ちひろ)

◇大津市生まれ。大学卒業後、父親が経営する会社に入り、35歳で社長に。同友会では、有志で児童養護施設に出向いて仕事の実演なども行っている。仕事体験参加企業は、



工務店や旅館、工場など93企業・事業所まで広がった。仕事体験への加盟の問い合わせは、県中小企業家同友会（077・561・5333）。

山口) 子どもの貧困、山口市でシンポジウム

朝日新聞 2017年1月22日

子どもの貧困について考える日本弁護士連合会主催の全国キャラバンのシンポジウムが21日、山口市の市民会館であり、弁護士や大学関係者、NPO法人の代表らが意見を交わした。



貧困問題や女性問題に取り組む熊本県弁護士会の阿部広美弁護士は講演で、「親の貧困が子どもの貧困に直結している」と指摘。携帯電話の料金が支払えずに近所の家に侵入して金品を盗んだ女子高校生の例をあげ、

「非正規雇用や低賃金、学歴などの影響で多くの人が貧困に陥る危険性がある」と述べ、住宅や医療の保障、再就職支援、給付型奨学金の支給など、社会保障の充実を訴えた。

「子どもの貧困」について話す阿部広美弁護士＝山口市民会館



ほかの講師は、家族のだんらんを通じた食生活の大切さなどを話した。（水田道雄）

広がれ 障害者スポーツ 東京パラ五輪へ盛り上げ

中日新聞 2017年1月22日

県など初サッカー教室

ゴールに向かってボールを蹴る参加者＝県立いしかわ特別支援学校で



知的障害者向けのサッカー体験教室が二十一日、金沢市南森本町の県立いしかわ特別支援学校で開かれた。二〇二〇年の東京パラリンピック開催に向け、県内で障害者スポーツを普及させるため、県と県障害者スポーツ協会が初めて企画した。

県内の小学生から四十代までの二十人が参加。講師は石川、富山両県のサッカー協会の指導者が務め、障害者スポーツについて学

ぶ金沢星稜大三年の十三人がサポートした。参加者は、軟らかく小さめなサッカーボールを蹴り、シュートが入るとうれしそうに手をたたき子もいた。

白山市千代野小学校一年の駒井将清（しょうせい）君（7つ）は、難聴のため手話で説明を受けながら参加。「初めてやったけど、キックが楽しかった。またやりたい」と笑顔で話した。

知的障害者サッカー体験教室は、二月二十五日にも同特別支援学校で開かれる。午前十時～正午。事前申し込みが必要。（問）県障害保健福祉課 076（225）1426（督あかり）

農業で障害者就労支援 地域再生準大賞 松山の団体受賞 共同通信 2017年1月22日

地域活性化に挑む団体を支援しようと、愛媛新聞など地方新聞45紙と共同通信社が設けた「第7回地域再生大賞」の各賞が21日決まった。大賞に次ぐ準大賞（副賞30万円）に、障害者の就労継続支援B型事業で農業を手掛ける「パーソナルアシスタント青空」（愛媛県松山市古川北3丁目）を選んだ。表彰式は2月17日、都内のホテルで行う。

各都道府県の地元紙が原則1団体ずつ推薦し、専門家で作る選考委員会が審査した。同社は、地域の耕作放棄地を活用し、農薬などを使わない自然栽培による低コスト農業を展開。B型の全国平均賃金の4倍超となる平均6万～7万円の月額賃金を実現している。

耕作放棄地で栽培したショウガを収穫するパーソナルアシスタント青空のメンバーら＝2016年12月、松山市恵原町

佐伯康人社長（49）は「大変驚いた。全国の仲間がいたからこそ受賞できた。かつては働けないといわれた障害者が、今では地域でいなくてはならない存在となっていることが大変誇らしい。これからも力のある限り活動を続け、障害者の力によって日本の耕作放棄地を再生していきたい」と話した。



Check! テレメンタリー2017「生き直したい～服役11回 更生の支え」



毎日新聞2017年1月21日
奥田知志さん（右端）らに出迎えられ刑務所を後にする津田久さん（左から2人目）＝ABC提供

◆テレメンタリー2017「生き直したい～服役11回 更生の支え」 ABC＝22日午前5時20分
罪重ねる障害者に「一人じゃない」

昨年6月、北九州市の医療刑務所から一人の男性が出所した。2006年に山口県下関市のJR下関駅に火を付け、懲役刑に服した津田久さん（仮名）には、この事件の前にも放火などで10度の逮捕歴があった。藤田貴久プロデューサー（52）は、軽度の知的障害がある津田さんら「行き場がなく、刑務所に戻りたいと願う累犯障害者の実態を知って」と話す。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行